

議案第10号

指定重要文化財の指定について

次の文化財を新たに指定重要文化財に指定する。

令和3年3月4日提出

横須賀市教育委員会

教育長 新倉聰

文化財を新たに指定重要文化財に指定する。

種別	名称	数量	所在地地番及び所有者
有形文化財 (彫刻)	銅造 観音菩薩立像	1 軸	西逸見町1丁目11番 宗教法人 浄土寺
有形文化財 (絵画)	紙本墨画 墨梅図 長島雪操筆	3 幅	浦賀7丁目11番4 長島 洋一
有形文化財 (歴史資料)	横須賀製鉄所製図 工長メラング家 旧蔵資料	71 点	深田台95番 横須賀市

(提案理由)

文化財保護条例第3条第1項の規定に基づき、指定重要文化財として指定するため。

(参照)

文化財保護条例抜粋

(定義)

第2条 この条例で文化財とは、文化財保護法及び神奈川県文化財保護条例（昭和30年神奈川県条例第13号）の規定による指定を受けた文化財以外の文化財で、次に掲げるものをいう。

(1) 有形文化財 建造物、絵画、彫刻、工芸品、書跡、古文書その他の有形の文化的所産で、歴史上又は芸術上価値の高いもの（これらのものと一体をなしてその価値を形成している土地その他の物件を含む。）並びに考古資料及びその他の学術上価値の高い歴史資料をいう。

(2) 無形文化財 演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産で、歴史上又は芸術上価値の高いものをいう。

(3) 民俗文化財 衣食住、生業、信仰、年中行事等に関する風俗慣習、民俗芸能及びこれらに用いられる衣服、器具、家屋その他の物件で生活の推移の理解のため欠くことのできないものをいう。

(4) 記念物 貝づか、古墳、城跡、旧宅その他の遺跡で、歴史上又は学術上価値の高いもの、庭園、橋梁、海浜その他の名勝地で芸術上又は観賞上価値の高いもの並びに動物（生息地、繁殖地及び渡来地を含む。）、植物（自生地を含む。）及び地質鉱物（特異な自然の現象の生じている土地を含む。）で学術上価値の高いものをいう。

(指定)

第3条 教育委員会は、前条第1号及び第2号の文化財を指定重要文化財として、同条第3号の文化財を指定重要民俗文化財として、同条第4号の文化財を指定史跡、指定名勝又は指定天然記念物（以下「指定史跡名勝天然記念物」という。）として指定することができる。

2 前項の指定は、文化財の所有者、占有者又は保存に当たっている者（以下「所有者等」という。）の申請によるほか、教育委員会が所有者等の同意を得て行うものとする。

3 教育委員会は、第1項の指定をしたときは、その旨を告示するとともに、当該所有者等に通知し、かつ、指定書を交付しなければならない。

◎議案第10号 「指定重要文化財の指定について」の説明資料

《資料目次》

- | | |
|---|--------|
| 1. 指定重要文化財等の指定について（答申）
令和3年2月24日付 文化財専門審議会からの答申書の写 | 5頁 |
| 2. 令和2年度新指定重要文化財指定理由書 | 6頁～8頁 |
| 3. 令和2年度（2020年度）指定重要文化財答申資料 | 9頁～27頁 |



令和3年(2021年)2月24日

横須賀市教育委員会
教育長 新倉 聰 様

文化財専門審議会

委員長 平田 大二



指定重要文化財等の指定について（答申）

下記の文化財3件について、指定重要文化財として指定すべき文化財であることを別紙指定理由書を添えて答申いたします。

記

1 指定重要文化財として指定すべき文化財

(1) 銅造 觀音菩薩立像

種 別 有形文化財(彫刻)
数 量 1 軀
所 在 地 横須賀市西逸見町1丁目11番(地番)
所 有 者 住 所 横須賀市西逸見町1丁目11
氏名等 宗教法人 浄土寺

(2) 紙本墨画 墨梅図 長島雪操筆

種 別 有形文化財(絵画)
数 量 3 幅
所 在 地 横須賀市浦賀7丁目11番4(地番)
所 有 者 住 所 横須賀市浦賀7丁目4-12
氏名等 長島 洋一

(3) 横須賀製鉄所製図工長メラング家旧蔵資料

種 別 有形文化財(歴史資料)
数 量 71 点
所 在 地 横須賀市深田台95番(地番)(横須賀市自然人文博物館)
所 有 者 住 所 横須賀市小川町11番地
氏名等 横須賀市

「銅造 観音菩薩立像」

指定理由書

- | | |
|----------|-----------------------------------|
| 1. 種 別 | 有形文化財（彫刻） |
| 2. 名 称 | 銅造 観音菩薩立像 |
| 3. 年 代 | 鎌倉時代後期 |
| 4. 所 有 者 | 住 所 横須賀市西逸見町1丁目11
氏名等 宗教法人 浄土寺 |
| 5. 所 在 地 | 横須賀市西逸見町1丁目11番（地番） |
| 6. 数 量 | 1 軀 |
| 7. 指定理由 | |

信濃・善光寺の秘仏本尊である阿弥陀三尊像を模刻した、いわゆる「善光寺式」阿弥陀三尊像の脇侍・観音菩薩立像である。当初の光背（一光三尊式）と中尊阿弥陀如來像や脇侍勢至菩薩像、および台座を亡失し、本体を納める厨子と台座は近世の後補である。

頭体幹部を一鋸とし、両肩から先の両腕をそれぞれ別鋸し、蟻柄により体幹部と連結させる構造をとる。

東光山浄土寺は、伝承では畠山重忠が建立した天台寺院で、当初は逸見山淨善寺と称したという。文明年間（1469～1487）に十一世文覚が、蓮如に帰依し真宗寺院となつたとされる（現在は浄土真宗本願寺派）。江戸時代初期に逸見を領地とした三浦按針（ウィリアム・アダムス、1564～1620）は、領内の浄土寺を菩提寺とした。

本像は三浦按針の念持仏とされ、近世以前には寺内の觀音堂に安置され、やはり三浦按針所縁とされる貝多羅葉経とともに伝來した（浄土寺所蔵『按針塚略縁起』）。

造立年代は、その細身ながらも抑揚のある的確な体躯表現や、丸々とした面貌、他の造像銘記のある善光寺式三尊像の作例との比較から、鎌倉時代後期頃（13世紀後期～14世紀初期）とみられ、中世に遡る金銅仏の遺例として、日本彫刻史上においても貴重なものといえよう。また造立年代は三浦按針の生没年を遡り、その念持仏とする伝承の蓋然性も高い。当時のヨーロッパにおいては鑄造製のキリスト像が流布しており、日本に居住した三浦按針にとって、金銅仏は親近性の高いものであったかも知れない。

一方、近年、共に伝來した貝多羅葉経は17世紀から18世紀のタイ・アユタヤ王朝期のものである可能性が高いことが判明し、学術的にも同じく三浦按針ゆかりのものである可能性が高まっている。今回の指定には含まないものの、近世以前に共に伝來した貝多羅葉経と、所縁の日本橋按針町から天保十一年（1840）に寄進された打敷も含めて、その保全が図られることが望まれる。なお、本像は明治五年の『ファー・イースト』誌に、三浦按針ゆかりのものとして、写真入りで紹介される。

本像は、鎌倉時代に遡る金銅仏の佳品であり、三浦按針の念持仏とするその伝来や歴史も含めて、横須賀市指定重要文化財に相応しいものといえる。

「紙本墨画 墨梅図 長島雪操筆」

指定理由書

1. 種 別 有形文化財（絵画）
2. 名 称 紙本墨画 墨梅図 長島雪操筆
3. 制 作 年 ①明治 21 年（1888 年）
②明治 23 年（1890 年）
③明治 25 年（1892 年）
4. 所 有 者 住 所 横須賀市浦賀 7 丁目 4-12
氏名等 長島 洋一
5. 所 在 地 横須賀市浦賀 7 丁目 11 番 4（地番）
6. 数 量 3 幅
7. 指定理由

長島雪操は八幡久里浜村の名主をつとめながら、文人画家として生きた人である。名を尚賢、字を虚卿という。書にも優れ、俳句も嗜んだ。幕末、文政元年（1818 年）に生まれ、明治 29 年（1896 年）79 歳で歿した。

雪操の作品は文人画（南画）の典型的画題である四君子（蘭、竹、梅、菊）や山水を描いたものが大半であるが、その絵画表現には文人画の一般的通念を超えた斬新な発想があり、大いに注目される。

墨梅図にはそれぞれ明治 21 年（71 歳）、同 23 年（73 歳）、同 25 年（75 歳）の贊があり、晩年の作となる。贊によれば、何れも新年の試筆という。

①図と②図は、画面構成が左右対称となる以外、おおむね同工の作で、奇怪な形姿の太湖石に満開の梅樹を組み合わせている。石の描写は筆を繰り返し横に掃くのみで、濃淡付けされた平面として処理され、梅の幹、枝は墨気の強い筆により誇張氣味に示される。そして梅花は過剰なまでに数多く描きこまれ、騒がしく自己主張している。墨の濃淡、面と線、ざわざわとした梅花の視覚的効果、それら要素によって構成された絵画世界である。両幅を比較するなら、②図では太湖石の表情が増幅され、背景に月を添えるなど、より演出を加えている。

③図では筆法を変え、輪郭的な要素を溶解してしまい、濃淡の墨をなすりつけるように各モチーフを描いている。身をくねらせた梅樹の姿は、擬人化されたようにも見え、ほの暗い心理的エネルギーの噴出を思わせる。全体に重苦しい印象もあるが、数条伸長させた立ち枝の纖細鋭利な筆線が緊張感を生み出してその弊を軽減し、梅花もここでは明朗な気分を添える役割を果たしている。写実性には殆どこだわらず、画家の心をそのまま筆墨に託したとでもいうべき表現であり、①図と②図に示された表現の発展形の様態として理解される。

往々筆線を強調的に用い、また筆墨の運動そのものを主眼とする造形に傾斜する。こうした独創的な雪操画風の頂点に位置付けられる作例がこれら墨梅図であり、直系の子孫に三幅揃って伝えられた品であることも貴重である。

「横須賀製鉄所製図工長メラング家旧蔵資料」

指定理由書

1. 種別 有形文化財（歴史資料）
2. 名称 横須賀製鉄所製図工長メラング家旧蔵資料
3. 年代 19世紀
4. 所有者 住所 横須賀市小川町11番地
氏名等 横須賀市
5. 所在地 横須賀市深田台95番（地番）
6. 数量 71点
7. 指定理由

「横須賀製鉄所製図工長メラング家旧蔵資料」は、横須賀製鉄所のフランス人技術者で製図工長のルイ・メラング（Louis-Alexandre-Hervé Mélingue）の子孫に伝來した横須賀製鉄所創設期の文書、図面、写真原本などからなる資料群である。

資料群は、ルイ・メラングとその父トーマス・メラングに関するものによって構成され、文書・図面類33点、写真38点の合計71点を数える。

文書・図面類は、メラング父（トーマス・ベンジャマン・メラング）に関する資料、横須賀製鉄所赴任前のメラングに関する資料、横須賀製鉄所時代（1865年～1869年）のメラングに関する資料、横須賀製鉄所時代（1865年～1869年）の資料の4種に区分される。写真是1866年～1868年の横須賀製鉄所や家族を撮影した一群である。

内容は、メラングが製図工長としてフランス現地で採用された一連の資料やその際の首長ヴェルニ一直筆サイン入りの雇用契約書、製図工長としてのフランス人官舎の見取り図、横須賀製鉄所でのフランス人技術者たちの日常生活を記録した日記や写真、古地図類などと多岐にわたっている。

これら資料群は、幕末から明治時代初期にかけて近代化の起点となった横須賀と横須賀製鉄所の歴史研究の進展に大きく資するものであり、本市にとって地域の歴史を伝える重要な資料であると同時に、日本近代史の中で高い歴史的価値を有するものである。

令和2年度（2020年度）

指定重要文化財等答申資料

有形文化財（彫刻） 銅造 觀音菩薩立像 1躯

有形文化財（絵画） 紙本墨画 墨梅図 長島雪操筆 3幅

有形文化財（歴史資料） 横須賀製鉄所製図工長メラング家旧蔵資料
71点

令和3年(2021年) 2月 24日

横須賀市教育委員会

例　　言

1 本報告は、教育委員会教育長から令和2年12月15日付けで諮問のあった「令和2年度の指定重要文化財等の新指定」についての答申のための指定候補文化財の詳細調査報告である。

目　　次

1 有形文化財（彫刻） 銅造　観音菩薩立像 調査者　文化財専門審議会	瀬谷貴之	11
2 有形文化財（絵画） 紙本墨画　墨梅図　長島雪操筆 調査者　文化財専門審議会	岩橋春樹	15
3 有形文化財（歴史資料） 横須賀製鉄所製岡工長メラング家旧蔵資料 調査者　横須賀市立自然・人文博物館	菊地　勝広	21

銅造 観音菩薩立像

瀬谷 貴之
(横須賀市文化財専門審議会委員)

所在地 横須賀市西逸見町1丁目11番

所有者 宗教法人 浄土寺

数 量 1軀

品 質 鋳銅製 鎏金

法 量 (単位 cm)

〈本体〉像 高 30.4

頂一頸	7.3	面 長	3.3	面 幅	2.9
-----	-----	-----	-----	-----	-----

耳 張	3.7	面 奥	3.8		
-----	-----	-----	-----	--	--

胸 奥	4.1 (中央)	腹 奥	4.5	肘 張	8.7
-----	----------	-----	-----	-----	-----

裳裾張	6.6				
-----	-----	--	--	--	--

〈台座〉総 高	14.5	最大張	16.8	最大奥	11.6
---------	------	-----	------	-----	------

〈厨子〉総 高	60.1	最大張	21.6	最大奥	17.3
---------	------	-----	------	-----	------

1 形状

如来形で立像の化仏を正面にあらわす八角形の筒形の宝冠を戴く。宝冠正面の化仏は拱手して拳身光を負い、その他の七面には宝相華文が施される。列弁と紐二条で天冠台とする。髪を結い上げて、正面から側頭部では髪束をあらわし、細かく髪筋を刻む。頭頂部では前面を半截の菊花状として髪筋を刻む。白毫相とする。腹前で右手を上にして両掌（たなごころ）を合わせ、両腕に臂釤、両手首に腕釤をつける。臂釤には半截の菊花状の飾りを施す。腕釤は紐二条とする。両肩に天衣、左肩から腹前に斜めに条帛、下半身には裳とその上に腰布を着ける。天衣は両肩から上腕内側に垂れる。条帛は左胸前でその先端をたくし込んで、左わき腹に垂らす。裳は腰部で折り返す。

その姿は、信濃・善光寺の秘仏本尊である阿弥陀三尊像を模刻した、いわゆる「善光寺式」阿弥陀三尊像の脇侍・観音菩薩立像となる。

2 構造

頭体幹部を一铸とし、両肩から先の両腕をそれぞれ別铸し、蟻柄により体幹部と連結させる。

铸造時に中型（なかご）と外型（そとご）を固定した頭頂から像底に至る鉄芯と、体幹部の中型土は除去されるが、頭部内に若干の中型土が残る。全体の表面に鎔金、白毫部分には鎔銀を施

す。像底前面に角枘を作り出し、台座上に差して固定する。

3 保存状態

本体を納める厨子、台座は近世の後補。

善光寺式だったとみられる、当初の光背（一光三尊式）と中尊阿弥陀如来像や脇侍勢至菩薩像、および台座を亡失する。

4 伝来など

東光山浄土寺は、伝承では畠山重忠が建立した天台寺院で、当初は逸見山淨善寺と称したといふ。文明年間（1469～1487）に十一世文覚が、蓮如に帰依し真宗寺院となつたとされる（現在は淨土真宗本願寺派）。江戸時代初期に逸見を領地とした三浦按針（ウィリアム・アダムス、1564～1620）は、領内の淨土寺を菩提寺とした。本像は三浦按針の念持仏とされ、近世以前には寺内の觀音堂に安置され、やはり三浦按針所縁とされる貝多羅葉経とともに伝來した（淨土寺所蔵『按針塚略縁起』）。

本像の造立年代は、その細身ながらも抑揚のある的確な体躯表現や、丸々とした面貌、他の造像銘記のある善光寺式三尊像の作例との比較から、鎌倉時代後期頃（13世紀後期～14世紀初期）とみられる。当初の光背、中尊、勢至菩薩像などを欠くものの、中世に遡る金銅仏の遺例として、日本彫刻史上においても貴重なものといえよう。また造立年代は三浦按針の生没年を遡り、その念持仏とする伝承の蓋然性も高い。当時のヨーロッパにおいては鑄造製のキリスト像が流布しており、日本に居住した三浦按針にとって、金銅仏は親近性の高いものであったかも知れない。

一方、近年、共に伝來した貝多羅葉経は17世紀から18世紀のタイ・アユタヤ王朝期のものである可能性が高いことが判明し、学術的にも同じく三浦按針ゆかりのものである可能性が高まっている。今回の指定には含まないものの、近世以前に共に伝來した貝多羅葉経と、所縁の日本橋按針町から天保十一年（1840）に寄進された打敷も含めて、その保全が図られることが望まれる。なお、本像は明治五年の『ファー・イースト』誌に、三浦按針ゆかりのものとして、写真入りで紹介される。

本像は、鎌倉時代に遡る金銅仏の佳品であり、三浦按針の念持仏とするその伝来や歴史も含めて、横須賀市指定重要文化財に相応しいものといえよう。



銅造觀音菩薩立像 正面

有形文化財（絵画）

紙本墨画 墨梅図 長島雪操筆

岩橋 春樹
(横須賀市文化財専門審議会委員)

所在地 横須賀市浦賀7丁目11番4

所有者 長島 洋一

数 量 3幅

①縦151.5×横47.9cm

②縦151.3×横48.0cm

③縦135.8×横65.3cm

1 長島雪操

長島雪操は八幡久里浜村の名主をつとめながら、文人画家として生きた人である。雪操は号。名を尚賢、字を虚卿という。書にも優れ、俳句も嗜んだ。幕末、文政元年（1818年）に生まれ、明治29年（1896年）79歳で歿した。

2 絵の概要

長島雪操の作品は文人画（南画）の典型的画題である四君子（蘭、竹、梅、菊）や山水を描いたものが大半であるが、その絵画表現には文人画の一般的通念を超えた斬新な発想がある。往々筆線を強調的に用い、また筆墨の運動そのものを主眼とする造形に傾斜する。

こうした独創的な雪操画風の頂点に位置付けられる作例がこれら墨梅図である。①には明治21年（71歳）、②には同23年（73歳）、③には同25年（75歳）の贊があり、晩年の作となる。識語によれば、それぞれ新年の試筆という。所有者は雪操直系の子孫である。

①と②は、画面構成が左右対称となる以外、おおむね同工の作で、奇怪な形姿の太湖石に満開の梅樹を組み合わせている。石の描写は筆を繰り返し横に掃くのみで、濃淡付けされた平面として処理され、梅の幹、枝は墨気の強い筆により誇張氣味に示される。そして梅花は過剰なまでに数多く描きこまれ、騒がしく自己主張している。墨の濃淡、面と線、ざわざわとした梅花の視覚的効果、それら要素によって構成された絵画世界である。

両幅を比較するなら、②では太湖石の表情が増幅され、背景に月を添えるなど、より演出を加えている。尤も、月を描きこむことには情趣に流れるという負の側面がある。

③では筆法を変え、輪郭的な要素を溶解してしまい、濃淡の墨をなすりつけるように各モチーフを描いている。身をくねらせた梅樹の姿は、擬人化されたように見え、ほの暗い心理的エネルギーの噴出を思わせる。全体に重苦しい印象もあるが、数条伸長させた立ち枝の纖細鋭利な筆線が緊張感を生み出してその弊を軽減し、梅花もここでは明朗な気分を与える役割を果たしている。写実性には殆どだわらず、画家の心をそのまま筆に託したとでもいうべき表現であり、①

と②に示された表現の発展形の様態として理解される。

雪操が規格外、型破りの画法であることを承知の上で描き、これで良しとした自信作であったのかどうかは伺ともいえない。ただ、贊の末尾に「筆墨拙悪不足觀」という、謙遜とも自負ともとれる文言を敢えて付していることには注目しておきたい。

各幅の現状は、表具に若干の折れ、浮きがみとめられるが、本紙自体の保存状態は比較的良好である。

3 贊語（改行は原文通り）

①牆角数枝梅、凌寒独自開、遙知

不是雪、為有暗香來、

明治廿一年

戊子新旦、

唐氣叶金

蘭

古

墨

試

淨

羊毫、

併録王安石句、雪操七十一老農賢、

※氣叶金蘭（きよきんらん）は唐墨の銘柄

②水月一色香世界、冰霜

千古玉精神、

明治廿三年庚寅新旦

試毫、

雪操七十三老農

長島尚賢、

③雪月成仙韵、風

煙肅野

姿、

壬辰新歲

試毫、

雪操

七十五

老農

長島
賢、
筆墨
拙悪不
足觀、

4 雪操関係資料

長島雪操については、各種の書画帖、模本類、印章等が多数残されており、その作品研究に資するところ大である。以下に主なものを掲げておきたい。

○写生画帖 2 冊

さまざまな植物を描いた写生画帖で、その一冊に「草木魚虫四時乱写生」の表題がある。天保 12 年（1841 年）から同 14 年にかけての筆。雪操 24 歳から 26 歳にあたる。何れも身近にある花卉、花木などを折枝画風に描き、ところどころに蔬菜、虫や小動物の図を交えている。描写は的確で、雪操 20 代半ばの頃の観察眼と写生力を伝えている。

○緑陰畫本 1 冊

中国・明、清時代の作品を山水画を中心に縮模した冊子で、各種贊語なども書写している。安政 5 年（1858 年）41 歳の時のもので、中国南画修学の一端がうかがわれる。

○緑陰堂書画稿 13 冊

総冊数は、明治 4 年・同 18 年～29 年にわたる 13 冊とされるが（長島氏提供仮目録）、調査に及んだのは、明治 18 年、同 23 年、同 25 年、同 26 年の年紀ある 4 冊であった。

自作書画の縮図を多数丹念に収録しており、現存する作品と比較照合することができる。ただし、全体の内容は身辺の文化的関心事や時事問題の記録にまで及んでおり、書画に限らぬ雑録風の内容である。

その内、明治 25 年のものには③の縮図がそのまま見え、また②の図柄を左右反転した作（贊語は同一）なども収められている。披見の範囲で述べるならば、およそ明治 20 年前後、雪操 70 歳にさしかかる頃には、独特の筆墨を特色とする雪操画風が完成していたものと推測される。縮図を通して、太湖石に組み合わせるモチーフは梅樹ばかりでなく、叢竹や菊花に置き換え、さまざまなバリエーション作が繰り返し描かれていたようである。

5 余録 三幅対構成

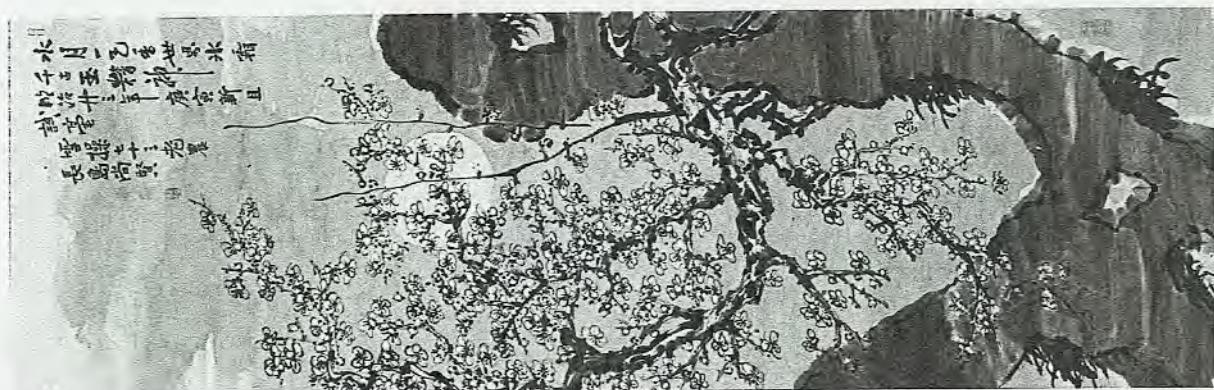
これは全く雪操本人が意図したはずもない話となるが、墨梅図を三幅対として取り扱うこと一つの考え方として提起しておきたい。すなわち、③を中心とし、①と②を左右に配した三幅対である。

①は左寄せの構図で右方向へ、②は右寄せの構図で左方向へ、それぞれ画面空間が内側に向かって展開し、その力が中幅③に収斂するのである。また、左右幅の太湖石の形姿は大きく波をうつて、それを中幅の梅樹、岩が受け止め、三幅通しての大きなリズムが生み出されている。

左右幅と中幅の筆法が硬と軟、使い分けられているのも効果的な視覚アクセントとなるだろう。

各幅単独で掛けるのも決して悪くはないが、三幅対とすれば個々作品の力が一つの世界として総合され、その魅力を一層引き出せるのではないかということである。これは鑑賞者の側から更なる創造行為を仕掛け、付加する試みと言って良いかもしれない。そのための前提として、表具の仕様、丈（縦長さ）を三幅揃えるならば準備万全である。

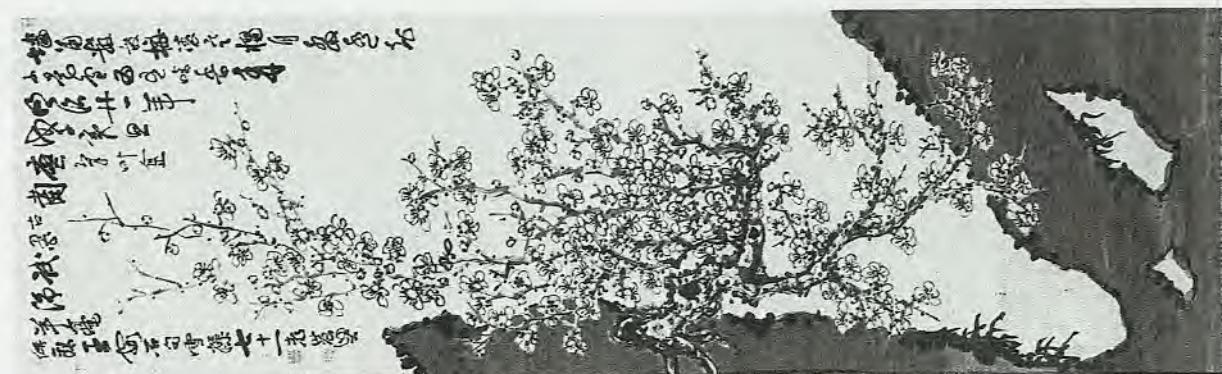
長島雪操 墨梅圖



(2) 明治二十三年（七十三歳）



(3) 明治二十五年（七十五歳）



(1) 明治二十一年（七十一歳）

横須賀製鉄所製図工長メラング家旧蔵資料

菊地 勝広
(市立自然・人文博物館)

所在地 横須賀市深田台 95 番
所有者 横須賀市
数 量 71 点

1 収集経緯

「横須賀製鉄所製図工長メラング家旧蔵資料」（以下「メラング家旧蔵資料」等と省略）は、横須賀製鉄所のフランス人技術者で製図工長のルイ・メラング（Louis-Alexandre-Hervé Mélingue）の子孫に伝來した横須賀製鉄所創設期の文書、図面、写真原本などからなる資料群である。資料群は、ルイ・メラングとその父トマス・メラングに関するものによって構成されていることから、原蔵者はこの父子であると判断して問題ないものと考えられる。資料群の数量は、文書・図面類 33 点、写真 38 点、計 71 点。

「メラング家旧蔵資料」の存在は一部の研究者の間では知られてきたものの、その全体像や詳細は広く紹介されてこなかった。そのような中、2017 年（平成 29 年）にフランスから所在情報と新たな収蔵先を検討中である旨の情報が横須賀市自然・人文博物館にもたらされた。

ルイ・メラングの子孫より近代史専攻のフランス人研究者に資料の移管の相談があり、フランスでは購入してまでの受け入れに体制が整わないことと、資料の保管の最善を考慮し日本の古美術商に打診があったというものであった。旧所有者の意向を反映できる収蔵先として日本の古美術商より本市への連絡につながった次第である。

当館では直ちに資料群の画像データを入手して資料調査に着手し、その歴史的価値を確認するとともに、収集準備を開始した。そして、所在情報入手の翌年、日仏交流 160 周年目にもあたる 2018 年（平成 30 年）に「メラング家旧蔵資料」は当館へ収蔵された。

2 資料の構成と内容

横須賀製鉄所製図工長資料総数 71 点の内容別の内訳は以下のとおりである。個別の資料名や撮影写真などの詳細は、文末の「資料画像一覧」、および参考文献（菊地勝広・飯島和歌子『横須賀製鉄所フランス人技術者ルイ・メラング家伝来資料目録（横須賀市博物館資料集第 44 号）』（横須賀市自然・人文博物館、2020 年 3 月））を参照されたい。

第一部 メラング父（トマス・ベンジャマン・メラング）に関する資料

人事記録や勲章授与証明書からなる 4 点。

第二部 メラングに関する資料

横須賀製鉄所赴任前の人事記録や業務関係の文書などからなる 14 点。

第三部 横須賀製鉄所時代（1865 年～1869 年）のメラングに関する資料

1865 年の雇用契約書、横須賀製鉄所時代の日記、名刺から長女の出生証明書など 10 点。

第四部 横須賀製鉄所時代（1865 年～1869 年）の資料

東京湾沿岸の全図（幕末）、横須賀製鉄所配置図、建築図面、日本名所一覧（広重画）等 5 点。

第五部 横須賀製鉄所時代の写真

1866 年から 1868 年撮影の横須賀製鉄所や家族の写真（鶏卵紙原本）を中心とした 38 点。

3 資料の歴史的価値

（1） 幕末明治初期の横須賀を伝える古写真原本群としての価値

幕末明治初期の横須賀を伝える古写真群で、メラング家旧蔵資料以上の水準に達するコレクションは、管見の限り、これまで世界で 3 例を知るのみである。

それは、横須賀製鉄所首長ヴェルニー一家伝来資料、同会計課長モンゴルフィエ家（ヴェルニー一家親族、Canson 製紙創業者・熱気球開発者一族）伝来資料、明治大学クリスチャン・ポラックコレクションに所蔵される 3 つである。さらに、メラング旧蔵資料はこれら 3 つの古写真群につぐ資料数に達するのみならず、これまで確認できていない新たな写真原本も含まれており、幕末明治初期の横須賀と横須賀製鉄所の歴史研究の進展に益する重要な資料であると位置づけられる。

（2） 横須賀製鉄所と横須賀市の歴史研究資料としての価値

「メラング家旧蔵資料」には、メラングが製図工長としてフランス現地で採用された一連の状況を物語る一次資料が含まれている。横須賀製鉄所では、フランス人の現地雇用や機械購入などの準備を進めるべく、柴田日向守剛中等を現地に派遣し、首長ヴェルニーとともに業務にあたっているが、資料にはこのことを裏付けるかのように、ヴェルニー、柴田日向守、メラングのサインが記された 1865 年 11 月 1 日付の雇用契約書が含まれている。続いて、1865 年 11 月 9 日付の文書では、ヴェルニーの要請でメラングが日本政府に雇用されヴェルニーの指揮下に入ることを通知した内容が記されている。その他、雇用契約の内容を記した 1865 年 9 月 25 日付の規則書、1865 年 11 月 18 日の書簡では日本への出発前の準備と滞在時に関するヴェルニーの助言がまとめられ、家具や衣服は横浜で入手可能である者の高額であるのでフランスで準備することを勧めるなど当時の国際交流や生活環境を窺い知る上でも興味深い内容が確認される。そして、翌 1866 年 1 月 10 日には、柴田日向守剛中がフランス人の現地雇用者や関係者を招いて開催した晩餐会への招待状が届き、その現物が「メラング旧蔵資料」に含まれている。採用後の資料としては、フランス語で記された横須賀製鉄所時代の名刺も含まれており、その寸法は現在の横須賀市役所職員が使用している名刺と 1mm 以内程度の相違でほぼ同寸法である。

製図工長の伝来資料である割に図面類は少ないが、「外国人用共同住宅見取図」は棟割長屋形式で使用人部屋があるなど、当時のフランス人官舎の間取りを窺い知る上で貴重な存在であり、「メラング旧蔵資料」にはフランス人官舎の写真も多いことから、当該分野の有益な研究資料であると考えられる。横須賀製鉄所の全体計画を記した1869年5月10日付の図面は、1869年の建造状態と施設の配置計画状況がわかる資料として貴重である。同類の資料は横須賀中央図書館にも所蔵されているが、記載内容が若干異なるのに加えて、「メラング家旧蔵資料」に含まれる図面では、各施設に細かな字で説明書きが追記されている。さらに、サインなどの記載も明瞭であり、より公式版の原本に近いことを窺わせるものである。各施設に記された細かな字での追記内容は、そのままに横須賀製鉄所研究を推し進めるものであり、その歴史的価値は多面的で高いものと判断できる。

また、ヴェルニーと幕府の役人のサインが入ったメラングの雇用契約書は、横須賀市が所蔵する唯一のヴェルニ一直筆サイン入りの資料と位置づけられるものである。当該資料とヴェルニー公園内のヴェルニー胸像の台座に刻まれているヴェルニーのサインは酷似しているなど、当該資料は地域史上でも貴重な存在である。さらに、当該資料の記載内容は、横須賀製鉄所の理事官柴田日向守剛中が記した渡仏中の日載とも整合性が取れるなど、横須賀製鉄所の歴史研究を補強する貴重な一次資料もある。

(4) 横須賀製鉄所でのフランス人の日常生活を記録した希少資料

資料群にはメラングが記した1868年と1869年の日記が含まれている。休日は家族で横浜に出かけて買い物をしていたことなど、業務以外の日常生活の一端が窺い知れる資料であるとともに、買い物の内容についても、横浜でのチョコレート購入の記録など、これまで紹介してきた歴史を遡るような注視すべき記述も散見されるなど、歴史資料としても貴重な存在であると考えられる。さらに、資料群には日本のものに加えて中国の古銭も含まれている。横須賀製鉄所のフランス人技術者には中国勤務を経て来日したものが多く、子孫には同時代の中国の資料が伝わる例が確認されるものの、メラングについては中国での勤務経験は確認出来ていない。

ほか、長女の出生を証明するレオン・ロッシュのサイン入り公文書（証人は医師サバティエと会計課長メルシェ）、日本人らしき女性たちがフランス人の子どもを可愛がって笑顔で世話を写した写真など、横須賀製鉄所のフランス人の日常生活の様子を伝え、感知させる資料を含んでいる点においても、希少性と歴史的価値が高い資料であると考えられる。

(5) 古地図類について

横須賀製鉄所が建設した野島崎灯台の敷地を含む鳥観図「房州野嶋ヶ寄真景（法田寺蔵版）」は、その内容から幕末から明治初期のものと推定されるものである。最近の調査で、この図と同一の資料がフランス国立公文書館に所蔵されていることが確認された（請求記号：F/14/20910）。この図は、野島崎灯台の設計者で横須賀製鉄所建築課長のルイ・フランがフランスの灯台建設分野の権威レオンス・レイノーにあてた1869年7月22日付の手紙に関連している資料として公文書館に保管されているものである。同図には、4つの位置情報が追記されており、凡例に「1 Tour provisoire（仮

設灯台)、2 Phare(灯台)、3 Gardien(警備)、4 Bonzerie(寺。滞在していたような追記あり)」(※括弧内は筆者注)と4つの説明が明記されている。ここから、野島崎灯台の建設地、仮設灯台の位置などが読み取れるとともに、同一の図が横須賀製鉄所製図工長と建築課長の縁者に伝来していることからみても、野島崎灯台の建設に際して、横須賀製鉄所が基本設計のみならず、現地調査も含めて建設の実務に深く関わっていた様子を窺わせるものであり、「メラング旧蔵資料」は、当該歴史研究分野においても貴重な存在であると指摘できる。

「大日本名所一覧」は、二代目歌川広重の作で、製作年代は慶応2年10月と判断できるもので、保存状態が良く発色が鮮やかな点も有益であると考えられ、横須賀美術館の版画をテーマとした企画展「見る、知る、学ぶ、作る版画ワールド」(2019年11月16日～12月22日)にも出品された。東京湾沿岸部一帯の地図は、現在の神奈川県、東京都、千葉県を全体的に記したもので、地名等の記載は現横須賀市域が最も細かく記されており、年代も幕末期と特定できるものである。江戸時代制作の同類の地図の現存例はいくつか知られるものの現横須賀市域全体の地名が細かく記されたものは、管見の限り、希少なものであると推測されるとともに、横須賀市域を始めとする地域史研究上でも有益で貴重な史料であると判断できる。

【参考文献】

- 1) 菊地勝広・飯島和歌子「横須賀製鉄所フランス人技術者ルイ・メラング家伝来資料目録」
『横須賀市博物館資料集第44号』(横須賀市自然・人文博物館、2020年3月) pp.1-65

旧横須賀製鉄所製図工長メラング家旧蔵資料一覧表

No.	資料番号	資料名	数量	法量	年代	備考
1	H-1-1	セント・ヘレナ勲章授与証明書	1枚	縦195mm×横295mm	1821年5月5日	ナポレオン1世のセント・ヘレナ勲章の授与を証明する証書。この勲章はナポレオン3世によって制定された。1821年5月5日、セント・ヘレナ島で作成。
2	H-1-2	人事通達書	1枚	縦330mm×横215mm	1849年6月5日	第2大隊の第8連隊の下士官に任命
3	H-1-3	退役に関する通達書	1枚	縦330mm×横215mm	1850年6月6日	
4	H-1-4	人事に関する公文書写し	1枚	縦300mm×横193mm	1850年5月6日	
5	H-2-1	任命書	1枚	縦287mm×横219mm	1846年3月23日	シェルブルール海軍工廠へ赴任させることを伝える文書。
6	H-2-2	命令書	1枚	縦330mm×横428mm	1855年4月28日	機械の組立に参加するため、直ちにブレストに赴任するよう伝える文書。
7	H-2-3	手紙	1枚	縦268mm×横420mm	1858年4月14日	2年間の製図工としての勤務とロワール県に沈んだ船 (le Bordeaux) の引き揚げ作業に対して、満足していることを伝える手紙。
8	H-2-4	青い便箋の手紙	1枚	縦205mm×横134mm	1862年10月30日	ズ運河の会社における10機の浚渫機械の監督官としての勤務を依頼する文書。
9	H-2-5	手紙と封筒	1枚	(手紙) 縦266mm×横210mm (封筒) 縦117mm×横150mm	1865年8月24日	手紙が真ん中で破れている。スエズ運河の会社より、浚渫機械建造が上手くいったことに対する特別賞与の支払いを伝える文書。宛名は、「M. L. Mélingue Maître de la Marine, 13 rue de Paris St. Denis」と記されている。
10	H-2-6	シェルブルール時代の名刺	1枚	縦55mm×横93mm	年代不詳	
11	H-2-7	手紙	1枚	縦258mm×横420mm	1870年2月25日	日本から帰国後の1870年3月1日よりシェルブルール港で再雇用する旨を伝える手紙。8 rue Aubert St. Denisに住所が変わっている。
12	H-2-8	昇進に関する公文書の写し	1枚	縦325mm×横215mm	1872年8月30日	2e classeに昇進
13	H-2-9	昇進に関する公文書の写し	1枚	縦325mm×横426mm	1878年1月21日	1e classeに昇進
14	H-2-10	パリ万博での功績を称える手紙	1枚	縦316mm×横420mm	1878年12月20日	1878年パリ万博（航海装備や海難救助に関するブース）で大きな貢献をし、委員全員からの賛辞に値すると記されている
15	H-2-11	士官用手帳	1枚	縦208mm×横130mm	1877年9月11日	シェルブルールにて発行。有給休暇の取得などが記載されている
16	H-2-12	フランス海軍在職記録	1枚	縦423mm×横265mm	1887年3月21日	メラングが海軍に所属した1844年3月22日から1879年2月10日までの、31年9ヶ月12日間の職歴が記載されている。普仏戦争に参加した2ヶ月を含むが、横須賀時代は除外されている。
17	H-2-13	命令書	1枚	縦330mm×横217mm	1889年4月17日	退役していたメラングに、海軍省が5月1日からシェルブルール港にて仕事に復帰するよう伝えた文書
18	H-2-14	テッサン 水車小屋	1枚	縦231mm×横313mm	年次不詳・19世紀	メラングの手によるものと思われるが、署名は読解困難
19	H-3-1	雇用契約書	1枚	縦360mm×横460mm	1865年12月8日	横須賀製鉄所製図責任者としての雇用。メラング、首長ヴェルニー、日本政府側の責任者柴田日向守、通訳官塙田三郎の署名がある。雇用契約日は1865年11月1日。
20	H-3-2	書状	1枚	縦315mm×横410mm	1865年11月9日	ヴェルニーの指揮下に入り、日本政府による雇用のもと横須賀製鉄所建設事業へ赴くよう通知する文書。
21	H-3-3	横須賀製鉄所規則書	1枚	縦303mm×横416mm	1865年9月29日	フランス人の構成と雇用条件を記した部分を抜粋したもの。
22	H-3-4	通知書	1枚	縦333mm×横443mm	1865年11月18日	日本への出発前の準備や横須賀での生活に関するヴェルニーからの助言等が記されている
23	H-3-5	柴田日向守剛中からの晩餐会への招待状	1枚	縦210mm×横267mm	1866年1月10日	柴田はヴェルニーと共に、フランスでフランス人の雇用や機械購入にあたった横須賀製鉄所の日本側の責任者。用務が落ち着いたころ、パリのグランドホテルでフランス人関係者を招待して晩餐会を開いた。メラング宛、1866年1月11日のパリでの晩餐への招待。「横須賀造船所」の押印あり
24	H-3-6	横須賀製鉄所時代の名刺	1枚	縦54mm×横90mm	1866年から1869年の間に推定	横須賀製鉄所製図責任者と記されている。
25	H-3-7	手帳・日誌	2冊	縦348mm×横125mm	1868年・1869年	メラングの横須賀での日常や仕事の状況が記されている
26	H-3-8	銅鏡	1枚	直径28mmが6枚、直径25mmが2枚、直径23mmが3枚	直径28mmが6枚、直径25mmが2枚、直径23mmが3枚	文久永寶5点、文久永宝1点、寛永通寶1点、寛永通寶と思われるもの2点、明命通寶1点、乾隆通寶1点
27	H-3-9	1867年の在日本フランス総領事館身分証明書の抄本（メラング長女の出生を証明する書類）	1枚	縦310mm×横405mm	1867年7月23日	メラング長女は、1867年7月23日横浜で作成。レオノン・シュの署名がある。証人として医師サバティエと会計メルシエの名前が記されている。長女の名前は、エルネスティーヌ・ルイーズ・アンリエット・マリー・アレクサンドリーヌ。
28	H-3-10	1867年の在日本フランス総領事館身分証明書の抄本（メラング長女の出生を証明する書類）	1枚	縦262mm×横205mm	1868年5月31日	
29	H-4-1	東京湾と三浦半島相模湾沿岸の地図	6枚1組	縦730mm×横1245mm	幕末期	東京湾沿岸部一帯と三浦半島の相模湾沿岸部の地名や航路などが記載されている。地名については、横須賀・三浦半島地区が特に細かく記されている
30	H-4-2	外国人用共同住宅見取図	1枚	縦368mm×横294mm	幕末期	横須賀製鉄所のフランス人用に建てられた住宅の設計図。左右対称で1棟に2軒の家の記載されている
31	H-4-3	1869年4月の横須賀製鉄所工事状況図	1枚	縦880mm×横1040mm	1869年5月10日	1869年4月の建設状況と計画状況が記されている。メラングの直筆の署名あり。縮尺：1/1000
32	H-4-4	房州野崎ヶ寄真景（法田底版）	1枚	縦400mm×横545mm	年次不詳	「野崎ヶ寄」は、横須賀製鉄所が親音崎灯台に統いて西洋式の灯台を建設した地。
33	H-4-5	大日本名所一覧（二代目歌川広重作）	1枚	縦365mm×横1220mm	1866年（慶応2年10月）	
34	H-5-1	横須賀村と猿島	1枚	縦176mm×横250mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	1866年頃	
35	H-5-2	建設中の集会所	1枚	縦188mm×横248mm (台紙込み) 縦228mm×横288mm	1866年頃	現在の米海軍横須賀基地司令部の建物周辺。この一帯は、当時、フランス人村と呼ばれていた
36	H-5-3	集会所及び仏人宿	1枚	縦200mm×横241mm (台紙込み) 縦228mm×横289mm	1866年末から1867年頃	

37	H-5-4	礼拝堂・司祭館・集会所など	1枚	縦196mm×横247mm (台紙込み) 縦226mm×横288mm	1867年頃	
38	H-5-5	礼拝堂・司祭館・集会所など	1枚	縦166mm×横242mm (台紙込み) 縦227mm×横288mm	1867年頃	
39	H-5-6	礼拝堂・司祭館・聖具納室	1枚	縦190mm×横240mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	1867年頃	
40	H-5-7	礼拝堂と新しく建った4棟の住居	1枚	縦180mm×横270mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	1868年頃	
41	H-5-8	フランス人住居4棟ほか	1枚	縦160mm×横220mm (台紙込み) 縦227mm×横288mm	1867年頃	現在の米海軍横須賀基地内。現地には、今でも、当時の住宅区画の面影が残されている。
42	H-5-9	「首長ヴェルニー住居・ロープ工場など	1枚	縦193mm×横255mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	1867年または1868年頃	中央の小高い丘の上に立つ2階建ての建物が首長ヴェルニーの住居。住居のあった丘は現在、失われている。右手に写る長い建物はロープ工場(製綱所)。
43	H-5-10	未完成の事務局	1枚	縦196mm×横237mm (台紙込み) 縦227mm×横288mm	1866年または1867年頃	正面にフランス人が2名と日本人が2名。うち1名は、髪は結ったまま洋装。窓から顔をのぞかせるフランス人らしき人物は、マラングに似ているようにも見える。建物の左側には「鐘」が見える。
44	H-5-11	「對岸から見た横須賀製鉄所、建設中のロープ工場」	1枚	縦188mm×横235mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	1866年末から1867年前半頃	ロープ工場(製綱所)が建設中であり、江戸時代の写真と確定できる。
45	H-5-12	首長ヴェルニー住居とロープ工場	1枚	縦182mm×横242mm 縦182mm×横242mm (台紙込み) 縦227mm×横288mm	1867年頃	左が横須賀製鉄所首長ヴェルニーの住居。1階が石貼り、2階が蔵造り風のなまこ壁を用いた外観となっている。右の長い建物はロープ工場(製綱所)。明治時代に取り付けられた時計台がないことから江戸時代の写真と推定される。
46	H-5-13	駐在所及び職人詰所の建物	1枚	縦171mm×横243mm (台紙込み) 縦226mm×横290mm	1868年頃	
47	H-5-14	造船台から見た切り崩した丘	1枚	縦188mm×横250mm (台紙込み) 縦228mm×横289mm	1866年頃	
48	H-5-15	切石・石材置き場	1枚	縦153mm×横190mm (台紙込み) 縦228mm×横289mm	1866年	
49	H-5-16	木材や石材の資材置き場	1枚	縦201mm×横275mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	年次不詳	手前に下水道設備の工事中の様子もみえる
50	H-5-17	浮橋からの眺め・起重機	1枚	縦161mm×横 (台紙込み) 縦227mm×横288mm	1867年頃	
51	H-5-18	造成中の第1号ドライドック	1枚	縦198mm×横243mm (台紙込み) 縦240mm×横303mm	1867年頃	横須賀製鉄所の第1号ドライドックは、明治4(1871)年に完成。現在でも米海軍横須賀基地内にて日米共同で使用されている。
52	H-5-19	木材と石材の荷揚げ場	1枚	縦189mm×横279mm (台紙込み) 縦227mm×横290mm	1867年頃	対岸に箱崎半島を望む
53	H-5-20	碇泊場奥の風景	1枚	縦184mm×横251mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	1866年頃	
54	H-5-21	遠見からみた横須賀製鉄所	1枚	縦188mm×横210mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	1868年頃	
55	H-5-22	対岸から見た横須賀製鉄所	1枚	縦195mm×横261mm (台紙込み) 縦228mm×横288mm	1868年頃	手前側の陸地は、現在のヴェルニー公園付近。
56	H-5-23	対岸から見た横須賀製鉄所	1枚	縦210mm×横270mm (台紙込み) 縦228mm×横288mm	年次不詳	
57	H-5-24	造船台上の燈明丸	1枚	縦175mm×横226mm (台紙込み) 縦239mm×横305mm	1869年頃	燈明丸は灯台の見回りや建設のための測量などに役立てられた船。横須賀所で建造された。
58	H-5-25	船台上の船	1枚	縦190mm×横241mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	年次不詳	
59	H-5-26	風景写真	1枚	縦168mm×横230mm (台紙込み) 縦227mm×横289mm	年次不詳	横須賀製鉄所から見た現在の横須賀本港周辺。手前側には植樹された樹木が確認できる。横須賀製鉄所では、今日でいう工場緑化のような取り組みを当初から実施しており、ロープ工場周辺などでも植樹を行っていたことがわかつている。
60	H-5-27	建造中の横浜丸(弘明丸)	1枚	縦186mm×横258mm (台紙込み) 縦244mm×横323mm	1869年	横浜丸は横須賀と横浜を結ぶ航路などで活躍した船。
61	H-5-28	造船台上の太平丸	1枚	縦198mm×横254mm (台紙込み) 縦241mm×横310mm	1869年	草創期の横須賀製鉄所において、船台では造船に加えて、小型船の修理作業を行っていた。船台は横須賀製鉄所で最も建設が急がれた施設の一つであった。
62	H-5-29	船台での作業の様子	1枚	縦203mm×横238mm (台紙込み) 縦240mm×横301mm	年次不詳	
63	H-5-30	横須賀製鉄所集合写真	1枚	縦143mm×横151mm (台紙込み) 縦227mm×横287mm	1868年頃	フランス人が5名、日本人が4名。前列右から二人目が製図工長マラング。左から二人目は建築課長フロラン。後列右から順に、書記官モンゴルフィエ、工事課長ゴートラン、会計課長メルシエ。
64	H-5-31	横須賀製鉄所フランス人集合写真	1枚	縦164mm×横228mm (台紙込み) 縦227mm×横288mm	1868年頃	後列左端がマラング、中央はヴィヨー、右端はデスバーニュ、前列左から順に、書記官モンゴルフィエ、会計課長メルシエ、工事課長ゴートラン、建築課長フロランと息子の計8名。
65	H-5-32	横須賀製鉄所フランス人集合写真(成人男性8名と少女)	1枚	縦64mm×横91mm (台紙込み) 縦165mm×横229mm	1868年頃	
66	H-5-33	横須賀製鉄所建築課長フロラン家族写真	1枚	縦111mm×横166mm (台紙込み) 縦163mm×横230mm	年代不詳	
67	H-5-34	マラング家族写真	1枚	縦102mm×横130mm (台紙込み) 縦226mm×横285mm	1868年	台紙に横須賀製鉄所1868年と記述がある。
68	H-5-35	マラング長女と日本人の女中さん	1枚	縦72mm×横48mm (台紙込み) 縦226mm×横289mm	1868年	マラング長女は横須賀生まれ。台紙に「横須賀製鉄所1868年」とのフランス語の記述がある。
69	H-5-36	マラング長女と日本人の女中さん	1枚	縦72mm×横50mm (台紙込み) 縦225mm×横287mm	明治初期	台紙に年号の記述はないが、H-5-35の写真と同時期の写真と思われる。
70	H-5-37	マラング夫人と長女アンリエット	1枚	縦118mm×横80mm	明治初期	台紙に年号の記述はないが、H-5-35の写真と同時期の写真と思われる。
71	H-5-38	4人の日本人の女中さんたちと子どもたち	1枚	縦89mm×横120mm	年次不詳	

* 資料番号について

H-1 マラング父(トマス・ベンジャマン・マラング)に関する資料

H-2 マラングに関する資料

H-3 横須賀製鉄所時代(1865年～1869年)のマラングに関する資料

H-4 横須賀製鉄所時代(1865年～1869年)の資料

H-5 横須賀製鉄所時代の写真

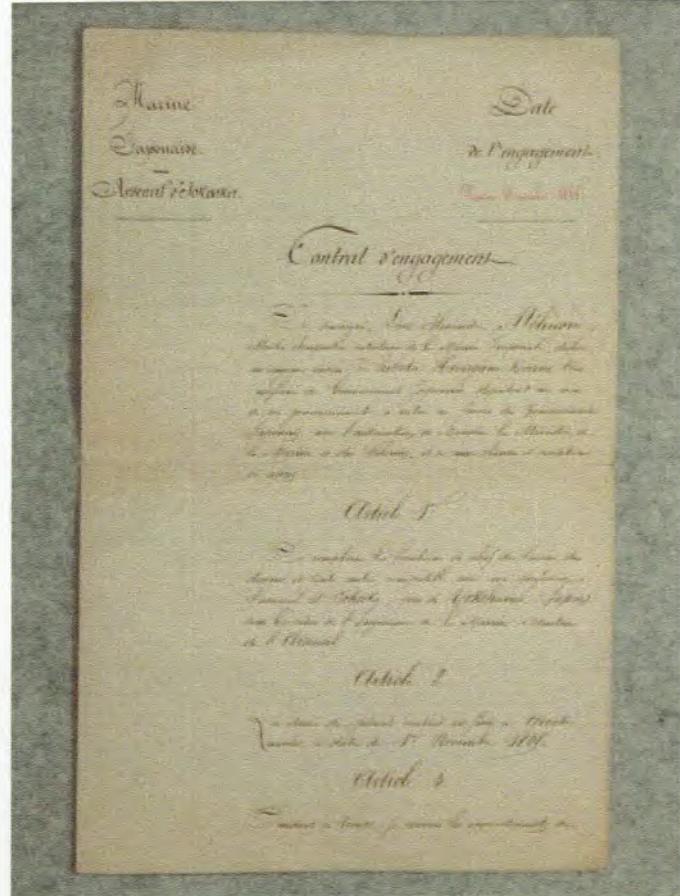


写真1 履用契約書 (資料番号 H-3-1)



写真2 横須賀製鉄所時代の名刺
(資料番号 H-3-6)



写真3 メラング家族写真 (資料番号 H-5-34)